

エッセイ 台湾研究を始めるということ

「代替地」研究から「台湾」研究へ向けて

植野 弘子

「代替地」としての台湾

なぜ台湾で研究を始めたか？ それは、台湾は中国大陆の代わりにフィールドワークができる場所であったからである。私が台湾を最初に訪れたのは1981年、博士後期課程1年次であった。社会人類学を学び、男性が支配的存在と見なされる父系親族体系における女性の存在をいかに捉えるかを研究の根底的課題としながらも、博士前期課程でフィールドとしたのは、奄美・沖縄であった。この地域は、日本本土と同様に、正確には父系社会とは言いがたい。博士後期課程では、本物の父系社会で長期フィールドワークを行いたい、いや、これをせずして人類学の研究者にはなれないという思いがあった。また、研究対象地域がアジアであることも動かしがたい。

となれば、アジアの父系社会の本家、漢民族社会での研究を行おうとなるが、当時の中国大陆では、フィールド研究には大きな困難があった。まず、社会主義革命、また文化大革命によって、伝統的な慣習が否定され破壊されているであろうという推測があり、そしてなによりも大きな決定的問題は、外国人が村落部に住み込んで調査研究することは不可能という状況があった。当時、人類学のフィールドワークでは、現地の人々とともに暮らし、日常生活のなかから研究課題に新たな気づきを得ることが、その真髄とされていた。中国大陆でこれができないのであれば、その代わりとなるのは、香港と台湾であった。私の研究課題から考えれば、強固な宗族がみられる香港新界のほうがフィールドとしては適していたであろう。しかし、日本とアジアの関係を考えてゆきたいと考えていた私にとって、50年に亘って日本の植民地であった台湾のほうが、将来、きっと研究に得るものが多いであろうと思われた。けれども、この思いが現実のものとなるまで、20年近くかかってしまった。

戒厳令下での日本人院生のフィールド研究

1981年8月、台湾におけるフィールド研究を目指して台北に暮らし始めた時は、いまだ戒厳令下であった。まずは、国立師範大学国語教学中心において中国語の学習を行いながら、台湾でフィールド研究ができる環境を整えていくことにした。国立台湾大学や中央研究院などの先生方を紹介していただいて訪ね、研究の指導、助言をお願いした。ある先生のアドバイスは、当時の社会そして研究のあり方をよく表している。

「政治には関わらないように。あなたに近づいてきて、政府の批判をする人がいても、それに

一緒にのらないように。『私は外国人なので、政治のことはわからない』と言って取り合わないように。」国民党政府の支配の抑圧を、我が身にも関わることとして知った。そして、台湾の研究者がいかに研究を行い、また日々を生きているのかを考えさせられた。

のちに、「あの1980年代前半に、日本の植民地期のことを聞いていたら、みんなまだ記憶が鮮明だったろうし、生きていた人も多かった。私の村にも、台南市役所に勤めていた人、警察官として海南島にいた人、家族が軍夫になった人、いろんな人がいた…。」と思ったが、この時代では、誰も深くは語ってくれなかったであろうとも思い返す。これらは、まさに「政治」に関わることもあった。

滞在2年目には、長期滞在の資格を得て、フィールドワークを開始しようとしていた。まず、国立台湾大学人類学研究所の院生となり、その後、中央研究院民族学研究所訪問学員となった。台湾語も語学学校で習った。調査地となる村落を探す際、最初に困ったのは、正確で詳細な地図が市販されていないことであった。フィールドワークを始めて後に、中央研究院民族学研究所図書館に航空写真があることがわかって喜んだが、コピーはできない。そこで、フィールドとなった村落近辺の地図作成に必要な部分をトレースしようとしたら、これも止められた。「じゃ、どうすればいいの？」と訊くと、「ただ見るだけ」とのことであった。正確な地図は、機密扱いである。戒厳令下ならではのことでもあるが、それでも外国人に対して村落部での居住が規制されていなかったのは、幸いであった。

台南の農村に暮らす

フィールドワークのために住み込む村を探すことが、台湾での研究活動の最大の難関であった。漢民族の父系親族体系における母方の儀礼的役割や姻戚関係をテーマとしていた私にとっては、台南地域が最も適したフィールドであった。そこで、台南縣文献委員会委員も務める知人の案内で村々をめぐる。ある村を訪ねた時、その村のたたずまいが心にしみた。朽ちた廟を突き破って緑の葉を茂らせる榕樹、その下でくつろぐ人たち、広がる甘蔗畑、なんともすがすがしい思いがした。さらに、新しい廟の建設中でもあった。「ここに住みたい」という思いがこみ上げてきたが、この村に住むためのコネがなく、いろいろと人脈を探したがうまくいかず、途方に暮れることになった。

その後、村に一緒に行った知人は、「もう一度行って、村長に頼んだら、なんとかなるだろう」と言いだし、私は、「そんなにうまくいくかな…」と、ほとんど絶望的な気持ちで村に出かけた。廟の榕樹の下でおしゃべりをしていた人たちに話しかけると、待っていましたとばかりに迎えられ、〈廟公〉がすぐに、この村の住民で日本語ができる方を呼んでくださった。そして、にこやかに現れ、日本語で「よくいらっしゃいました」と挨拶してくれたのは、「陳さん」である。今もそのときの様子は鮮明に思い出す。「陳さん」はすぐに私が住み込む家を探してくれ、私のフィールドの村は決まった。信じられない展開であったが、以前に訪れた際に、知人は私がこの村に来ることになればよろしくという話はしておいたとのことであった。絶望的に思えたフィールド探

しも、私が行くのを待っていた人がいたのだった。その後、「陳さん」は私の台湾民俗研究の師となり、慣習に関する豊富な知識、台湾語に対する深い造詣、そして公学校教育のみとは信じられないほどの高度な日本語で、私の研究を支えてくださった。

この村に住み込むことができたのは、私が日本人であったこともあろう。当時、日本語ができる人たちが、プライベートの場で日本語で会話するのは、よくあることであった。「陳さん」にとって、私はよい話し相手であったのかもしれない。また、村の人たちにとっても、日本人女性の私は興味津々の来訪者であったろう。1982年12月から1984年8月まで、私はこの村に暮らしたが、このときほど人びとからの関心・視線を日々感じたことはない。この村でのフィールドワークは、自分が人を見るのではなく、まさに人に見られるものであった。

「台湾」研究へ

中国大陸の「代替地」として選択した台湾でのフィールドワークは、当然、台湾ならではの課題にすぐに突き当たる。村の人々の祖先について調べれば、福建からの移住者による地域社会の形成を考えなければならない。また、祖先の位牌を調査すれば、日本統治期に「正庁改善運動」によって、日本式の繰り出し位牌となったことを知る。日本統治期の「戸口調査簿」は、原物がそのまま戸政事務所に置かれ、参照され活用されていた。こうした状況でありながらも、私の研究は、「漢民族の父系原理と女性を介在した姻戚の役割」というテーマがメインであり続け、そこに「台湾」をどれほどみていたか、反省ばかりである。この悔いが、2000年頃からの私の研究関心―「植民地台湾の『日本化』とその後」に繋がっていったともいえる。これが真の「台湾研究を始めるということ」なのかもしれない。

(2025年3月31日記)